

『どちらが異安心か』より抜粋

——「六字の名号は機法一体に成就されてあるから、こちらの信不信にかかわらず、首と胴とは離れていない、然るに君は信が欠けたら首なし安心と言っているのは不届き至極である」と注意されたが、学問の上からは君の言わるる通りであるけれども、実地の求道者の立場から言えば、いかに機法一体に成就されてあっても、領受しなければ有れどもなきが如しである。「これはしたり、世は逆様になりにつけり、乗ったひとより馬が丸顔」と言う歌があるが、「これはしたり世は逆様になりにつけり、裁く人より無限絶大」博士や勧学に信仰の教授をしなければならぬ時代になったとは末代の不思議だ。

御覧なさい。観經の第九の真身觀の「光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨」の念仏は仏を念ずる觀念に非ず、下三品の劣機を攝取する称名念仏である。天台、淨影、嘉祥の等の諸師が下三品の念仏を撰大乘論の四意の中の別時意に相当するものにして方便説なり、

因よつて遠おん生の結縁けつえんとなるものにして即時そくじの往生おうじように非あらずとせしに對たいして、終南しゆうなんは古今ここん楷定かいじようの妙みよう釈しゃくなる六字じしやく釈もつを以もつてこれを擊破げきはされて、勇名ゆうめいを轟とどろかして人世じんせいの後半こうはんが一じ時に有名ゆうめいに成なつたから半金色はんこんじきの姿すがたと言いっているのであるが、下三品げぼんの機きは肉にく体たいの臨終りんじゆうが迫せまり、苦逼くひつ失念しつねんの機きが火車かしや来現らいげんの恐おそろしさに虚空こくうを掴つかむ時とき、善知識ぜんちしきの教おしえにより十声しやう一声しやうとう等の称名しやうみやうにより即得そくとく往生おうじようした事ことを顯あらわし、祖師そしは心こころの臨終りんじゆうに根基こんきを置おいて下中品げちゆうぼんの聞已もんい即滅そくめつを我機わがきにあてて唯信独達ゆいしんどくたつの法門ほうもんを發揮はつきされたのである。君達きみたちは身命終しんみやうじゆうでもなければ心命終しんみやうじゆうでもない、第三者だいさんしやの批判ひはんの立場たちばに立たつて觀念かんねんの遊戯ゆうぎをしていゐるのだ、苦くるしさもなければ嬉うれしさもない、唯ただ合点がってんしてゐるだけだ。聖人様しやうにんさまはお泣なきなさるぞ。

「南無なむと言いふは歸命きみやう、亦是また発願廻向はつがんえきやう之義のぎなり、阿弥陀仏あみだぶつと言いうは即是すなわち其行これそのぎやうなり、斯この義ぎを以もつての故ゆえに必かならず往生おうじようするこゝとを得うる」と説明せつめいされたが、歸命きみやうとは信順無疑しんじゆんむぎ、と君達きみたちは直訳ちやくやくしてゐるが、どうした時ときが信順無疑しんじゆんむぎか、実地じつちの求道きゆうどうをしてゐないから君達きみたちには意味いみが判わからな

いのだ、二河譬の旅人が自分である事を知らないのだ、空曠の沢のほとりを西に向かって歩み続け、群賊悪獣に迫られて惶怖せねばならないのに、君達は素直な真似をして笑顔でいるではないか、忽ちに見る大河あり、罪惡觀と無常觀に攻め立てられて、三定死の境地に立ってぢりぢり舞いしているのだに君達は話に聞いているではないか。

汝 — 十方衆生

第十八願の意味を善導は汝一心正念にして

一心 — 至心信樂

直に來れ我能く汝を護らんすべて水火の難

正念 — 乃至十念

に墮せんことを畏れざれと教えられたと君達は

合点しているだけで畏れていないのだから大

慶喜がないのだ

直來 護汝 — 若不生者不取正覺

ただちにきたれなんじをまもらん

にやくふしようじやふしゆしようがく

不畏おそれざれ（慈悲じひ）——唯除ゆいじよ（智慧ちえ）

実地じつちに体験たいけんした人ひとなら、本ほん当とうに自分じぶんがその境地きやうちに立たって地団駄じだんだを踏ふみ、苦逼くひつ失念しつねんの自分じぶんが、我能われよく汝なんじを護まもらんの勅命ちよくめいに飛とび上あがり信順しんじゆん無む疑ぎせずにはおられないのだ、祖師そし聖人しょうにんの境地きやうちで言いえば「何いずれの行ぎやうも及および難がたければ」と地団駄じだんだふまれ「五劫いこう思惟しゆいの願がんを」と飛とび上あがられた時ときは、すかさされても瞞だまされてもかまわぬと言いう信順しんじゆん無む疑ぎの味あじを歸命きみやうと言いうのだ、合点がってんしているのとは桁けたが違ちがうぞ。

発願ほつがん廻向えきやうとは如來にょらい已すでに発願ほつがんして衆生しゆじやうに廻向えきやうされるのであつて、勅命ちよくめいに歸順きじゆんしたと同時どうじに是これ其その人ひとの行ぎやうとなる、斯この義ぎを以もつての故ゆえに必かならず往生おうじやうする事ことを得うると説明せつめいし、諸師しよしは下三品げさんぽんの機類きるいは唯願ゆいがん無行むぎやうなるが故ゆえに往生おうじやうは得えられないと言いつているが、凡夫ぼんぷが願がんをおこし凡夫ぼんぷが行ぎやうを修しゆしたのでは凡夫ぼんぷの願行がんぎやうなるが故ゆえに凡夫ぼんぷの世界せかいにしか行いかれないではないか、仏ぶつの願行がんぎやうを領受りやうじゆすることによつて、仏ぶつの願行がんぎやうで仏ぶつの世界せかいに行いかして頂いたくのが仏ぶつの大慈悲だいじひではないかの

論法に諸師顔色なし、大衆拍手喝采、一躍して古今楷定の名師と讃えらるるに至ったのだ。

如来已に発願して衆生に廻向さるるのだから、已に発願され即是其行に成就されて有るの

だから首（願）と胴（行）とは離れていない、御尤も、学者はそれ迄しか判らないのだ、

学問し合点したのを信仰と思っっているのだから、前にも問題が出て学問と信仰とどこが違う

かと君達は言っているが、演習と実戦程の違いが有るのだ。たとい八万の法蔵を読んでも

一念の信を諦得していなかったら雑誌を読んでいるのと同じ事だ、学問を羅列して喜んだ

り、有難がったり、雁首つけたり、人形の首をつけかえて喜んでいるが、血が通うていない

から生きた活動が出来ないのだ、法体成就の機法一体は十劫の昔に出来上がっているが、

信念冥合の機法一体が聞即信の一念に成就する事を知らないのだ。如来已に発願して衆生

に廻向すると言われているが、廻向して貰ったか、真実功德大宝海を領受したか、不可称

不可説不可思議の功德が満ち満ちたか、即是其行に成ったか、八万の法蔵を全領したか、聞

即信そくしんの一念ねんで往生おうじょうの一大事いちだいじが決定けつじようしたか、何年なんねん経たっても開発かいほつが出来できず、晴はれたも暮くれたも判わからず、若存にやくぞん若亡にやくもうに腰こしを据すえ、何時いつとはなしに済すんだ積つもりで、死後しごを夢見ゆめみて、溜息ためいきばかりの生活せいかつを続つづけているのは、膺首にせくびをつけ替かえているだけで、機きと法ほうとが相応そうおうせず、願がんと行ぎようとが一致いちしていないから破満はまんの徳とくが得えられないのだ。君達きみたちのような観念かんねんの遊戯ゆうぎをしている善人ぜんにんを救すくう為ための法義ほうぎではない、為物いもつだい大悲ひの親おやは法龍ほうりゆう一人ひとりを救すくう為ための願行がんぎようであつて、十劫じゅうの昔むかしに助たすけるに間違まちがいないと正覺しょうがくを成就じやうじゆされても、私わたしが聞きき開ひらかなかつたら私わたしの親おやは泣ないているのだ、私わたしが領受りやうじゆしなかつたら八万はうぞうの法蔵わつしも私わたしにとっては反古ほごだ、私の苦くが抜ぬけない間は三仏ぶつも死しに者ものだ、生いかすも殺ころすも開発かいほつしたかせぬかで決きまつて来るくのだ。

私わたしはこの腹はらで布教ふきやうしている、重ねかさて言ういう、二種しゆじん深信しんが徹底てつていしなかつたら八万はうぞうの法蔵わつしは有あれども、無なきが如ごとく、私わたしには無用むようの長物ちやうぶつだ、三仏ぶつの必死ひつしの努力どりよくは私わたし一人ひとりを生いかささんが為ためであるのに、唯合点ただがってんのみで一体たいに成なり得えなかつたら水泡すいほうに帰きするのだから三仏ぶつも死しに者ものになるのだ。

往生おうじようらいさん礼讃れいさんに専せん雑ぞうの得失とくしつを判はんずる中なかに「若もし上かみの如ごとく念々ねんねんそうぞく相續そうぞくする者ものは十すなわは即すなわち十生うまれ、百すなわは即すなわち百生うまれ、何なにを以もつての故ゆえに、外げの雜縁ぞうえんなくして正念しやうねんを得えたるが故ゆえに、仏ぶつの本願ほんがんと相そう應おうするが故ゆえに、仏ほとけの教おしえに違いせざるが故ゆえに、仏語ぶつごに随順ずいじゆんするが故ゆえに」と四得とくを挙あげてあるが、これを御和讃ごわさんに

利他りたの信樂しんぎやううるひと 願がんに相そう應おうするゆえに

教きやうと仏語ぶつごにしたがえば 外げの雜縁ぞうえんさらになし

と仰おほせられて、二種しゆじんしん深信てつていが徹底てつていした時ときが、利他りたの信樂しんぎやうを得えた時ときで、三仏ぶつを生いかした時ときであり、八万はうぞうの法藏はうぞうを読よみ破やぶつた時ときだ、一番ばんの源みなもとは二種しゆじんしん深信しんぎやうにあるのだ、上かみの如ごとく念々ねん相續そうぞくする者ものはと何なにを指ゆびさしているか、「自身じしんは是煩悩これぼんのうを具足ぐそくせる凡夫ぼんぷ 善根ぜんこん薄少はくしやうにして三界さんがいに流轉るてんして火宅かたくを出いでずと信知しんちす、今弥陀いまみだの本弘誓願ほんぐせいがんは名号みやうごうを称しょうすること十声しやう一声しやう等に及およぶまで

定^{さだ}んで往^{おう}生^{じょう}を得^えしむと信^{しん}知^ちして 乃^{ない}至^{しいち}一^{ねん}念^ぎも疑^ぎ心^{しん}あることなし、これ^{これ}を深^{じん}心^{しん}と云^いう」、君^{きみ}達^{たち}
は第^{だい}三^{さん}者^{しや}の立^{たち}場^ばで成^{なる}程^{ほど}と合^が点^{てん}してゐるだけだから、三^{さん}千^{せん}世^せ界^{かい}の罪^{ざい}惡^{あく}を一^{いち}人^にで荷^{にな}うてゐる深^{しん}刻^{こく}
な罪^{ざい}惡^{あく}感^{かん}が有^あられないのに、撰^{せん}取^{しゆ}され^た無^む上^{じやう}甚^{じん}深^{しん}の妙^{みやう}味^みが有^あらるる筈^{はず}がない。二^に種^{しゆ}一^ぐ具^ぐ、一^い
念^{ねん}同^{どう}時^じと口^{くち}では立^り派^{っぱ}に言^いつてゐるけれども、二^に種^{しゆ}が一^ぐ具^ぐに徹^{てつ}底^{てい}してゐないのだから一^{ねん}念^{ねん}の味^{あじ}
は判^{わか}らないのだ、一^{ねん}念^{ねん}の味^{あじ}の判^{わか}らないのを真^{しん}宗^{しゆう}の正^{しやう}意^いと思^{おも}つてゐるのだから、真^{しん}宗^{しゆう}が滅^{めつ}亡^{ぼう}す
るのが当^{とう}然^{ぜん}ではないか。

大^{おお}沼^{ぬま}は話^{はなし}を聞^きいた合^が点^{てん}では通^{とお}れなかつたのだ、書^{しょ}物^{もつ}を読^よんだ理^り解^{かい}では満^{まん}足^{ぞく}でしなかつたの
だ、言^{こと}葉^はを離^{はな}れ文^も字^じを離^{はな}れた親^{おや}に逢^あいたかつたのだ、十^{じゅう}劫^{かく}の昔^{むかし}に助^{たす}かつてゐると言^いう話^{はなし}でな
くて今^{いま}の苦^く惱^{のう}が今^{いま}救^{きう}われ^たかつたのだ、今^{いま}が生^{しやう}死^じの苦^く海^{かい}に溺^{おぼ}れてゐる姿^{すがた}ではないか、今^{いま}が
火^か宅^{たく}の中^{なか}で火^ひを噴^ふいてゐる姿^{すがた}ではないか、死^し後^ごの地^じ獄^{ごく}より今^{いま}の自^じ業^{ごう}苦^くが遁^{のが}れたかつたのだ、
聞^ききつつ墮^おちる 称^{とな}えつつ墮^おちる罪^{ざい}惡^{あく}と無^む常^{じやう}に驚^{おどろ}いたのだ、往^{おう}生^{じやう}の望^{のぞ}みの絶^たえた時^{とき}と、我^{われ}能^よ

く汝を護らんの勅命の届いた時は同時であつた、親様!! 唯とはこの儘であつたかと言葉に

掛けて飛び上がったのは後念相続の上であつて、その前の言葉に掛らぬ不可称不可説

不可思議の信樂、「弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて往生をば遂ぐるなりと信じて

念仏申さんとおもひ立つ心のおこる時撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり」 撰取不捨

された一念の味の判らない者は親に逢うていないのだ。司教とか勸学とか人間の付けた肩書

で判る筈が有るものか、一念抜きで後念相続で死後を眺めて有難がつているのだから水際も

角目も関所もあるものかい、唯信独達は丸潰れだ、こんな無安心、無歸命の学者連中が法

城を淳誠やら鉄城やらで護っているのだから真宗が衰滅するのは当然だ。仏智満入の一

刹那無量永劫流転の絆は截たれ、一声十声尽形寿と念々相続する者は十は即ち十生ま

れ、百は即ち百生る と終南は仰せられたのだ。これを蓮師は一念の信定まらん輩は十人は

十人ながら百人は百人ながら と仰せられたのではあるが、真宗の道俗は君達を始めとして

その一念を何時とはなしに白河夜船で通った積りでいるが阿呆らしくて物が言えない、この一念こそ三定死を突破して二種深信の徹底した味ではないか、話や合点位で通れるか、堕ちるに疑いなし参れるに疑いなしと徹底したのを、終南は乃至一念も疑心あることなしと仰せられ、蓮師は露塵ほども疑いなければと仰せられたのであるのに、真宗の同行は法のお手元は疑われないが、この機がどうもしゃんとせん、するものかい、救われてはいないのだもの、僧侶はもう一つ桁が落ちるのだ、初めから助かった気でいるのだから実地問題の入口にも入っていないのだ。

二種は一具だから信機の無い者は信法も徹底してはいないのだ、信法の貫いている人は信機も無我になっているのだ、その境地の人を 外の雑縁なくして正念を得たるが故にと、四重の破人に逢うても正念は乱動しないのだ、八方から攻撃を蒙りながら祖師は死に行く人々の批評位であとすだりが出来るかい、死なぬ仏に逢うたが証拠だと微笑まれたように、大沼

も全国的に批難攻撃する有象無象は相手にせず、真宗学の泰斗と自負する三人の勧学を相手に
学問と実地の太刀打を始めているのだ、争う為の争いではなく仏智を開闡する為の争い
だ。祖師の真意を発揮する為の争いだ。

君達は演習と実戦の区別がつかないのだから合点と深心の区別もつかず、感情と自性との
境目が判らないのだから理解と自督の安心の味が判らないのだ、お聖教の文字だけを読んで
裏に溢れている親の念力を諦得していないのだ。二種深信が徹底した人が正念を得た人で、
三仏を生かしたのだ。唯除逆謗と切り堕とされた機が、若く不生者の念力に生かされ、至心
信樂己を忘れて大満足さされた時が、阿弥陀仏の第十八願、大經を生かした事になるの
だ。その境地まで調機誘引する為の八千遍の御苦勞であつたのだから、開発した時が釈尊の
第十九願開説の觀經を生かした事になるのだ。恒沙の諸仏の証明は、難信の法を領受さす為
の証明であつたのだから、開発の一念に諸仏の受持の第二十願開説の小經を生かした事に

なるのだ。

これを祖師聖人は「利他の信樂うるひとは、願に相應するゆえに、教と仏語にしたがえば、外の雜縁さらになし」と、その反対を言えば「利他の信樂えぬひとは、願に相應せぬ故に、教と仏語にそむく故、雜縁来たり乱るなり」で、三仏を生かすも殺すも開發したかせぬかにあるのだ。君達は學問の定規だけ知って融通無碍、神通自在の妙味を知らないのだ、可哀想に學問の化石、骨董品だ、六字は凡夫の信不信にかかわらず首と胴と離れていないと言つてゐるが、法體成就の機法一体を眺めて有難がつているのは、觀念の遊戲をして死後を楽しんでゐるので、君達の魂とは無關係だから永劫流転を続けるのだ。機法一体に十劫の昔に正覺を成就したと言う事は、どんな難化の衆生でも攝取するに間違いないと言う腕前が成就したので、開發さされた時が、腕前が顕れた時ではないか、正覺を成就した親が十劫已来立ち續け今漸く信樂開發さされた一念に仏智満入し、信念冥合の機法一体で念劫融即し、親が生き

たぞ子が生きたぞ、親子の名乗りの上った時が五劫思惟の願をよくよく案ずれば法龍一人が為なりけり、で私一人の為の本願だから私が開発しなければ親が泣くではないか、泣くとは精神的に殺しているのではないか、それだから生かすも殺すも開発の如何にあると言ったのだ。この位の意味が君達には判らないのか、判らなければ第十五の質問に於いて詳説して上げる。真如の月は十劫の昔に昇天しているけれども疑雲に閉ざされて濁水に影を宿していないのだ、御聖教の指に拘泥して指を通して月を仰ぐ事を忘れているのだ、機中に印現しているのなら天上の月をみる儘が水中の月、水中の月を見る儘が天上の月、二つかと言えば一つなり、一つかと言えば二つなり、機法は二種なれども一具なり、一具なれども能所の別あり、弥陀を離れて法龍なく、法龍を離れて弥陀もない、法を離れた機もなく機を離れた法もない、歡喜の儘が懺悔であり、懺悔の儘が歡喜である。機を抜きにした法は実地の体験もなく、親に逢うた自督もない、觀念の遊戲であり、学問の羅列に過ぎないのだ。

次^{つぎ}に質^{しつもん}問、

第一問、南無^{なむ}は機^きの方^{かた}、阿弥陀^{あみだ}仏^{ぶつ}は法^{ほう}の方^{かた}と十劫^{じゅう}の昔^{むかし}に成就^{じょうじゆ}したと言^いう事^{こと}が、十方衆生^{じゆじやう}が助^{たす}かったという事ですか。

第二問、南無^{なむ}は機^きの方^{かた}、阿弥陀^{あみだ}仏^{ぶつ}は法^{ほう}の方^{かた}で出来上^{できあ}がっただけでよいのなら信心^{しんじん}も安心^{あんじん}もいらないでよいか。

第三問、一^{いっ}体^{たい}に成就^{じょうじゆ}した事^{こと}を知ら^しないから流轉^{るてん}しているのですか、機法^{きほう}一^{いっ}体^{たい}に成就^{じょうじゆ}されたの^ので助^{たす}かっている事^{こと}を知ら^しなんだと知^しった時^{とき}に助^{たす}かるのですか。

第四問、十劫^{じゅう}の昔^{むかし}に助^{たす}かっているのなら 知^しる知^しらないに關^{かか}わらず助^{たす}かっている筈^{はず}ですが、
どうして知^しる必要^{ひつよう}があるのです、赤ん坊^{あかぼう}が知^しらなければ親^{おや}は着物^{きもの}を着^きせませんか。

第五問、十劫^{じゅう}の昔^{むかし}に助^{たす}かっている事^{こと}を知ら^しなんだと信^{しん}じた時^{とき}が助^{たす}かるのだと布教^{ふきやう}している

が、それは知解ちげの分齊ぶんさいで十劫秘事じっこうひじではないか。

第六問、話はなしを知しつて有難ありがたがつているのは罪惡觀ざいあくかんも無常觀むじょうかんもなく二種深心しゅじんしんになつていないが、それで信仰しんこうが徹底てつていしたと言えるか。

第七問、機法きほう一体いつたいに六字ろくじが成就じょうじゆされてある事ことを知るしのが唯信独達ゆいしんどくたつの祖師そしの極意ごくいか、六字じを諦得たいとくするのが祖師そしの真意しんいか。

第八問、法体成就ほつたいじょうじゆの機法きほう一体いつたいを死後しごの向むこうに眺ながめて有難ありがたがつておればそれで助たすかるのか、信念冥合しんねんめいごうの機法きほう一体いつたいが徹底てつていした時ときに助たすかるのか。

第九問、仏智満入ぶつちまんにゅうとか、機受きじゆの信相しんそうとか、行者正受金剛心ぎやうじやしょうじゆこんごうしんとか、機中きちゆうに印現いんげんするとか、自督じとくの安心あんじんとか、信樂開発しんぎようかいほつとか、全然不用ぜんぜんふようで機きの領受りやうじゆを忘わすれて唯死後ただしごを眺ながめておればよいのか。

第十問、仏智の不思議が徹底した事は全然意識には乗らないのか、それでどうして安心が出来るのだ（君達が開発していないから意識に乗らないのだろう）

第十一問、信仰は馬鹿が闇夜に方角が判らずに鉄砲を放ったような取りとめのつかないものか。

第十二問、心中閉塞で苦しんだ事がないから信楽開発の天地、十方法界我物なりの大慶喜がないのではないか。

第十三問、南無阿弥陀仏は願行具足、機法一体に成就して有ると知って信じて合点したのは贗首を置いただけであって 信楽開発の一念の信の徹底した時が親子の血が通う生きた六字の活躍となるのではないか。

第十四問、君達は何時とはなしに頂いて、はつきりした事はないと言っているが、捨自歸

他、二種深信は一念同時の味であつて、祖師は立所に他力摂生の旨趣を受得せり、五劫思惟の願をよくよく案ずれば親鸞一人が為なりけりと言う大自覚を得られたと言うのは嘘か、明信仏智とか今こそ明らかに知られたりと言われたのも嘘か。